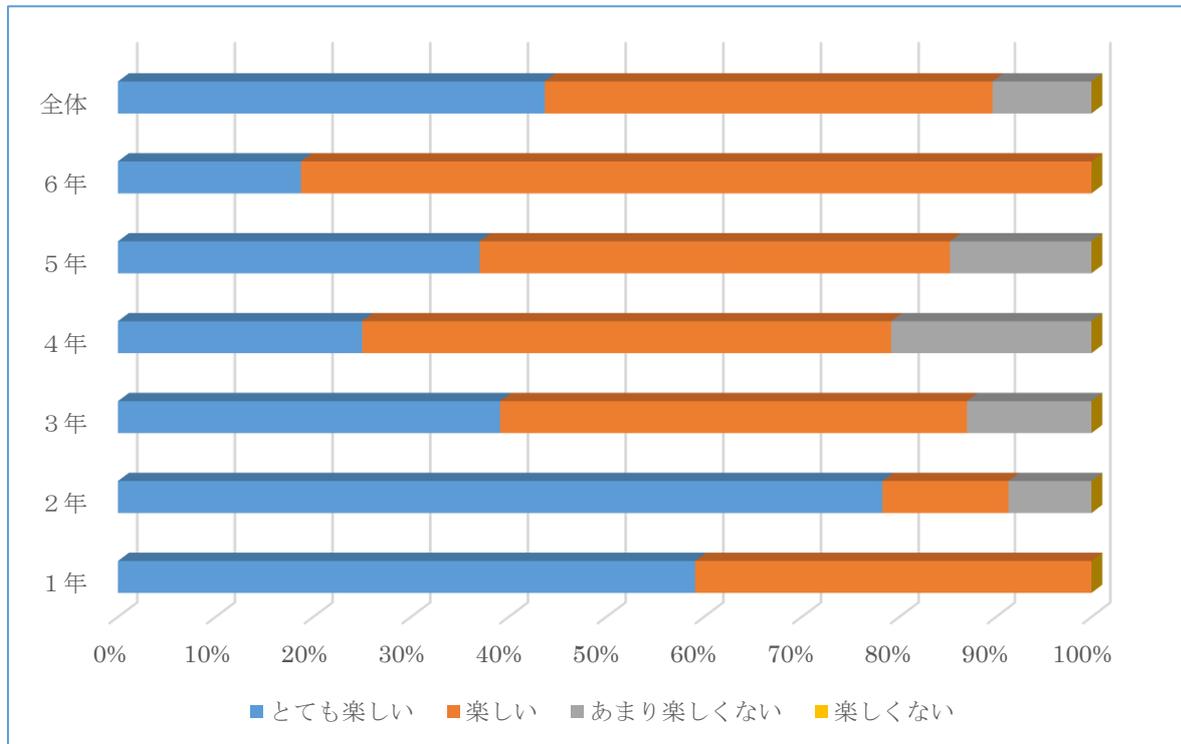


文部科学省教育課程特例校制度（天草市教育委員会外国語科推進事業）による
令和2年度外国語科に関する調査結果

天草市立佐伊津小学校

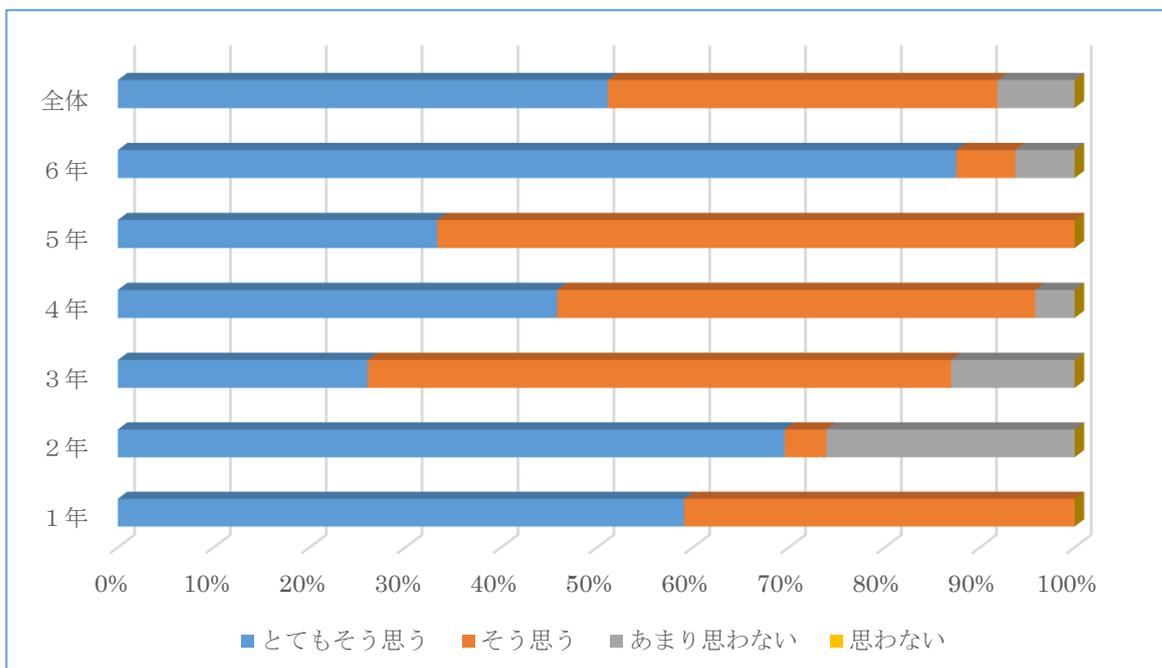
1 児童アンケート結果

(1) 外国語科の授業は楽しいですか。



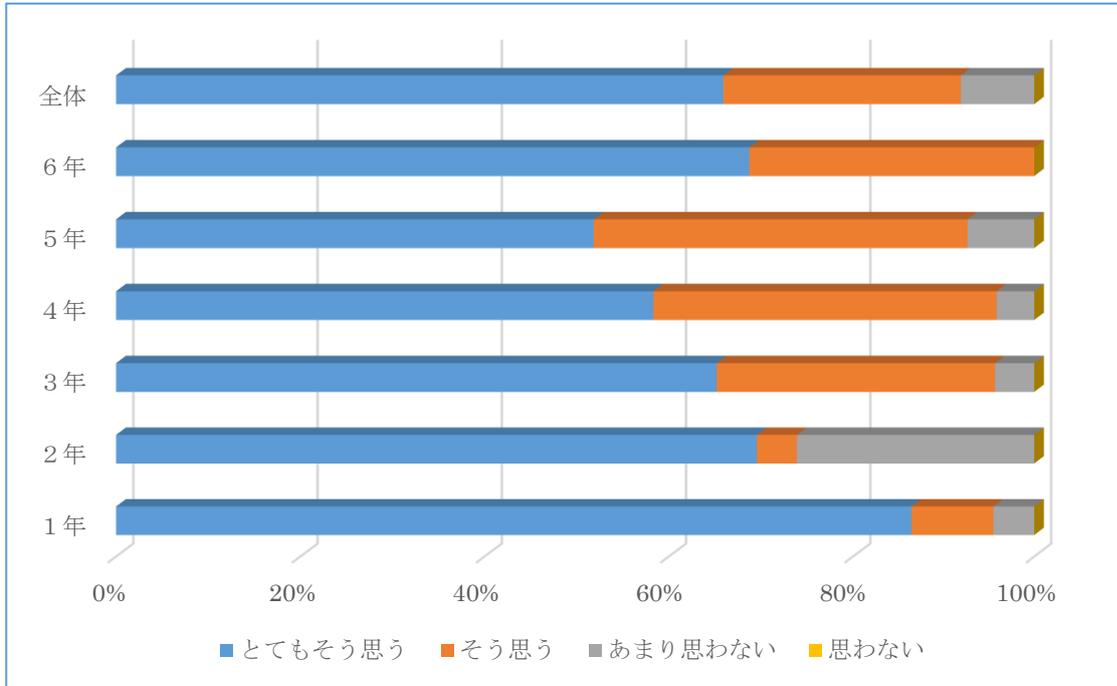
児童全体で、約90%の児童は外国語科の授業が「とても楽しい」「楽しい」と答えている。しかし、学年差があり、約10%は「楽しくない」と回答している児童もいるため、外国語科の授業において、今後も授業展開や指導の工夫が必要であると思われる。

(2) 外国語科の授業は好きですか？



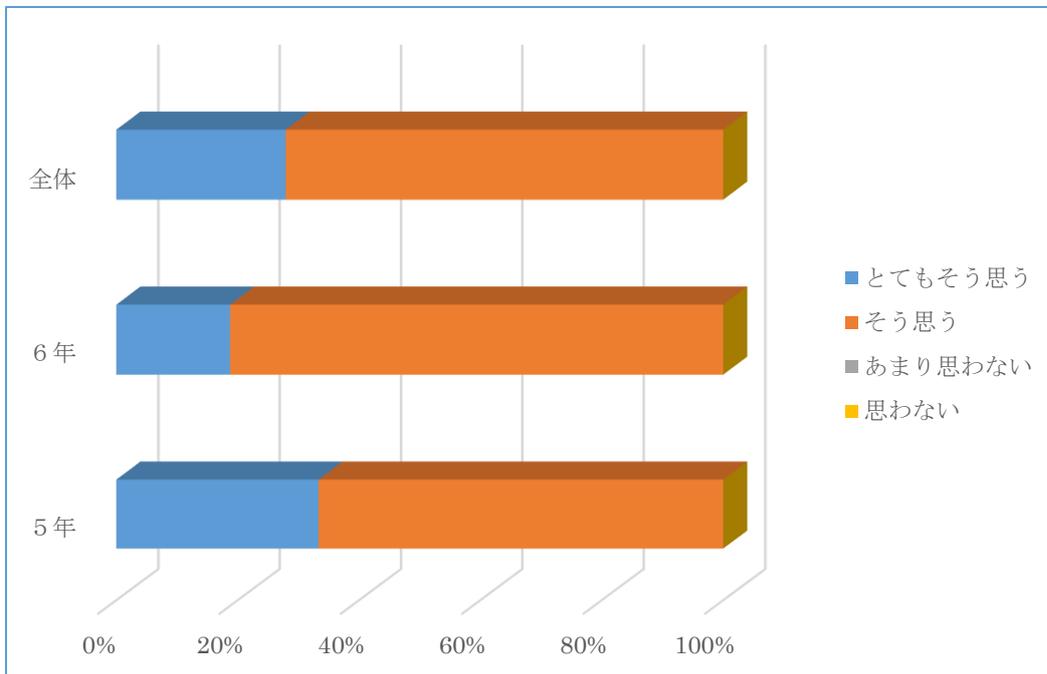
全体で、92%の児童は、外国語科の授業が「とても好き」「好き」と答えている。(1)の結果と相関関係が見られる学年とそうでない学年が見られる。英語専科(3~6年)、ALT(3~6年)、英語指導補助教員(1~2年)、学級担任は児童が取り組みやすいよう、歌や簡単なゲーム等を用いながら、授業を行っている。英語に対して楽しみに感じているが、4年生の結果のようにそれが好きと一概には言えないことが分かる。また、全体で8%の児童は好きではないと答えているため、授業展開や教材教具の工夫が今後さらに必要になると思われる。

(3) もっと英語が話せるようになりたいですか。



児童全体で、91%はもっと英語が話せるようになりたいと答えている。外国語科の授業がある日や、英語専科、ALT、英語指導補助教員の勤務日には、英語で話しかける児童も見られる。高学年になるにつれ、英語が話せるようになりたい気持ちと有用性を実感しているが、低学年は英語が生活の一部として使うことがあまりないため、有用性は感じていないと思われる。また、全体では8%の児童は苦手意識を持っていると思われるため、引き続き「分かる、できる授業づくり」や有用感を与えられる取組を目指して取り組む必要がある。

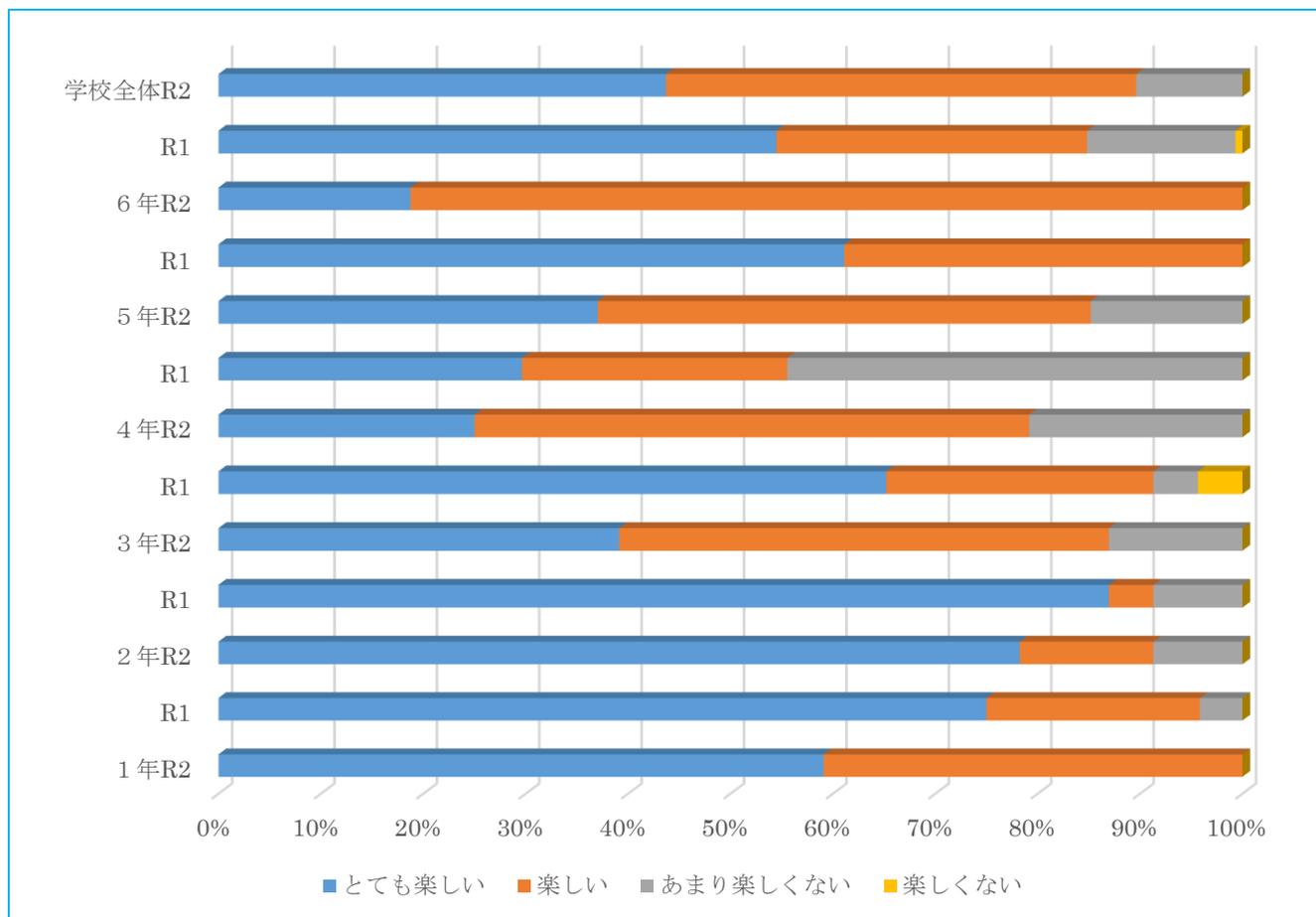
(4) 英語の授業は、わかりますか。



全体で約20%が英語の授業が分かると「とても思う」、また「とてもそう思う」「そう思う」は100%、5・6年の児童が回答している。英語の授業が「分かる」ことが児童の「好き」「楽しい」の判断基準と考えられる。

2 昨年度との比較

(1) 外国語科の授業は楽しいですか。

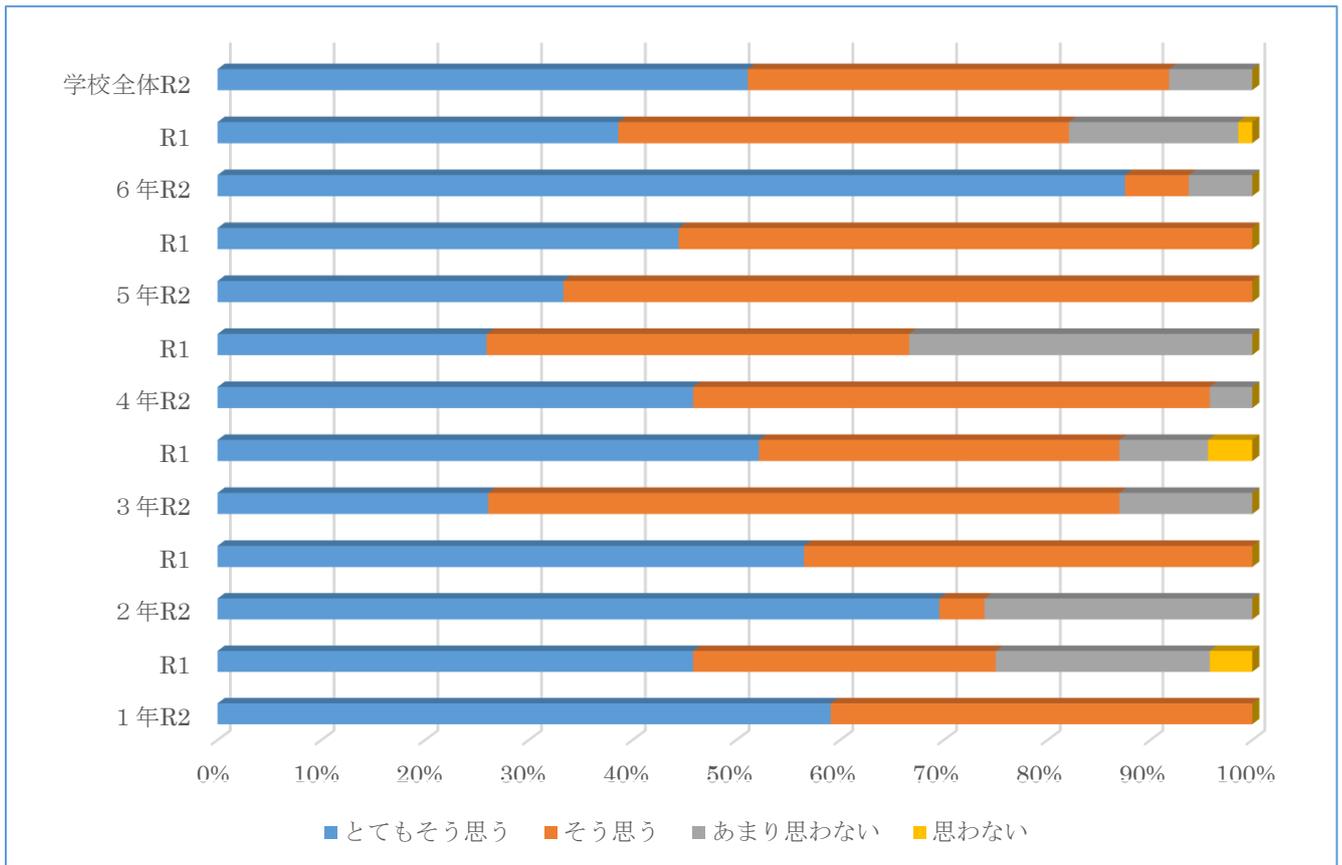


全体を見ると、「とても楽しい」と回答した児童は昨年より約10%減少しているが、「とても楽しい」「楽しい」の回答は、今年度若干増えている。

また、「とても楽しい」の回答を経年比較すると、現2年、現5年が増加しており、「とても楽しい」「楽しい」を含めた回答は、現5年では約30%増加、現6年は100%を保っている。

「あまり楽しくない」「楽しくない」を含めた回答は、全体で若干減少している。

(2) 外国語科の授業は好きですか？



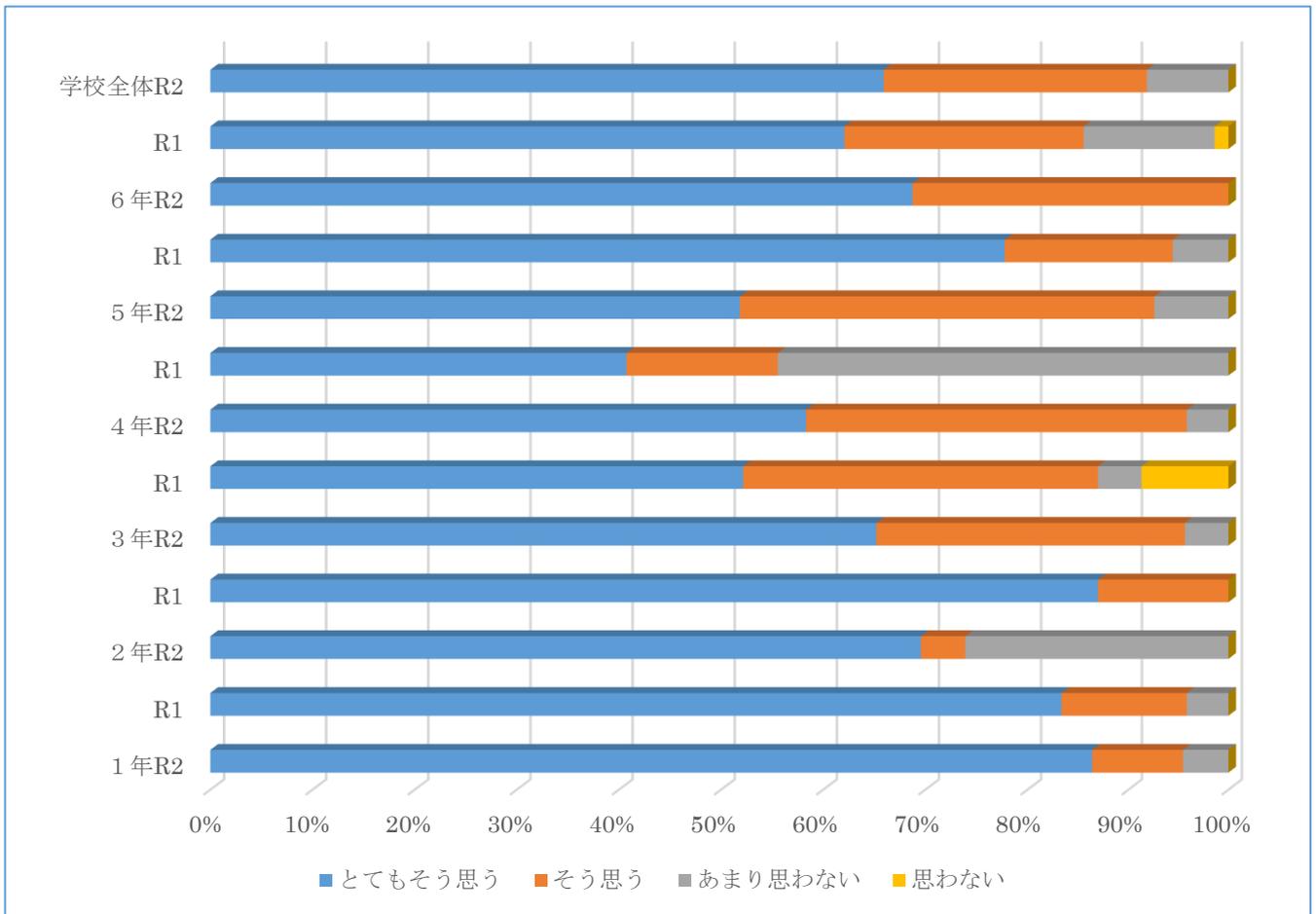
全体を見ると、「とてもそう思う」と回答した児童は昨年より約10%増加している。

また、「とてもそう思う」の回答を経年比較すると、現2年、現5年、現6年が増加しており、特に「とてもそう思う」「そう思う」を含めた回答は、現5年では約35%増加しており、「あまりそう思わない」「そう思わない」の回答がなくなっている。

「あまり楽しくない」「楽しくない」を含めた回答は、全体で約10%減少している。現3年と現6年には「あまり思わない」「思わない」の回答が増えている。

今年度から2年生から3年生にかけては外国語活動となり補助教材を扱うようになったこと、5年生から6年生にかけては外国語が教科とになったことや英語専科、ALTの教員の入れ替わり等などが理由の一つと考えられる。

(3) もっと英語が話せるようになりたいですか。



全体を見ると、「とてもそう思う」と回答した児童は昨年より若干減少しているが、「とてもそう思う」「そう思う」を含めた回答は、今年度約5%増えている。

また、「とてもそう思う」の回答を経年比較すると、現4年、現5年が増加しており、特に「とてもそう思う」「そう思う」を含めた回答は、現4年では約10%増加、現5年では約35%増加している。現4年と現6年では「あまりそう思わない」「そう思わない」の回答が減少している。

「あまりそう思わない」「思わない」を含めた回答は、全体で約5%減少している。現2年と現3年には「あまり思わない」「思わない」の回答が増えている。

「(2) 外国語科の授業は好きですか？」の回答と相関関係が若干見られる。

アンケートの結果から、本校の児童は外国語科の授業をとても意欲的に受けていることが分かった。授業を行う教員は、この児童のモチベーションを保つことができるよう、また苦手と感じている児童にとって「分かる・できる授業づくり」を引き続き工夫しながら行っていく必要がある。

児童が激動する社会の変化に対応し、グローバル社会を生き抜く力を身につけるため、今後も外国語科の授業を中心として国際理解教育の充実を図っていきたい。